みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

問われるストリート・エスノグラフィーの方法：都市の無意識を歩く作法：アレゴリーの力：遊歩と痕跡：都市の記憶を読む技法について

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-03-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 近森, 高明
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001227

第1部

問われるストリート・エスノグラフィーの方法

関根康正編『ストリートの人類学』上巻
国立民族学博物館調査報告　80:53-71（2009）

都市の無意識を歩く作法
――アレゴリーの力

遊歩と痕跡
都市の記憶を読む技法について

近森　高明
日本女子大学

本稿は，W. ベンヤミンの都市論に描かれる遊歩者の〈陶酔〉について，その理論的な意義を〈痕跡〉という概念のもとで読み解く試みである。都市の記憶の深層に触れる行為としての陶酔的遊歩―その内実を照らしだすためにベンヤミンの２つの思考ライン，すなわち類似性を含むイメージやミメーシス能力の問題がかかわる言語哲学のラインと，プルースト的な無意志的記憶やフロイト精神分析の問題が結びつく記憶論のラインをたどりつつ，両者が収斂する地点に痕跡概念が位置することを論証してゆく。その過程をつうじて陶酔的遊歩は，街路上で痕跡を蒐集し，その歪みに含まれる謎をミメーシス的に判読するなかで，忘却された過去を想起する行為として再構成される。〈読むこと〉〈想起すること〉〈迷うこと〉という３つの契機からなる，痕跡のもとでの陶酔的遊歩からは，ストリート現象をめぐる認識と存在の方法への示唆を受けとることができると結論づけられる。

1　痕跡の判読
2　読むこと
3　想起すること
4　迷うこと

キーワード：ベンヤミン，遊歩者，陶酔，痕跡，記憶

1　痕跡の判読

W. ベンヤミンが旅行に訪れた先のヨーロッパ諸都市の肖像を描いた，一連のエッセイ群がある。そこでベンヤミンは，ひとりの遊歩者として街路を散策しつつ，都市の日常をかたちづくる些細な事物をたんねんに拾いあげている。ちょうど都市写真で有名なE. アジェが「街の堂々たる景観」や「シンボル的建築物」には目もくれず，むしろ「ブーツの靴型の長い列，晩から朝まで手押し車が整然と並べられているパリの中庭，同じ時間に何十万単位で存在しているような，食事のあとの食卓や片付けられていない洗面道

具」（ベンヤミン 1995c: 571）にこそ情熱をもってレンズを向けたように，ベンヤミンはナポリの軽食屋台やモスクワの路面電車，ベルリンの小さな礼拝堂や，パリの絶滅に瀕したパサージュといった，あまりに自明すぎて，人びとの日常的意識から抜け落ちてしまうような周縁的事物にこそ，熱心なまなざしを注ぐのである[1]。そうした断片的細部はしかし，たんに見逃されやすい細部というわけではなく，重要なのは，それらの細部が一種の「痕跡」という地位を占めている点である。写真家と遊歩者がともに街路で探し求めているのは，それ自体としてフェティッシュな偏愛の対象となる些細な事物というよりも，街路に残され，かつての出来事や生の営みを沈黙のうちに暗示する，痕跡としての断片的細部にほかならない。アジェの写真について，ベンヤミンはこのように述べている。「彼は 1900 年頃のパリの街路を，人影のない風景として定着した。彼は街路を犯行現場のように撮影したと言われているが，これは至言である」（ベンヤミン 1995c: 600）。眼前の街路にくり広げられつつある，人びとの生の営みをあえて捨象し，まるで犯行現場の写真のように，ごく即物的な痕跡のみをフィルムに定着させること――そうしてフィルムに定着された痕跡は，死んだ物象に過ぎないにもかかわらず，意義深い謎を含んでおり，見る者にその謎を判読するよう迫ってくる。そのように眼前の都市から，人びとの営みが織りなす活気やアウラを払拭し，生の連関から切り離された，死んだ痕跡へと都市風景を変貌させつつ，そこに都市的現実の真相を逆説的にあぶりだすというのがアジェの都市写真の方法であるが，ベンヤミンの遊歩もまた，街路上に残された痕跡をひとつひとつ蒐集し，その痕跡に封印された意義を判読するなかで，表面的なアプローチでは到達しえない都市の深層に触れようとする点で，アジェの方法と深く結び合っている[2]。

遊歩は，そもそもパサージュ研究を構想した当初から，街路空間に残存する過去の痕跡を判読する方法として，ベンヤミンの関心を惹きつけていた。研究の着想にあたり，ベンヤミンがアラゴンの『パリの農夫』から霊感をえたというのは有名な挿話だが，とりわけベンヤミンを強く魅了したのは，いまや時流から取り残された，絶滅寸前のパサージュのなかでの遊歩をめぐる夢幻的かつ神話的なイメージであった。人びとに見捨てられ，忘れ去られ，いまや衰滅の間際にあるパサージュこそが，痕跡を求める遊歩者の特権的な舞台背景となる。廃物としてのパサージュには，革命的なエネルギーが含まれているという発想を，ベンヤミンはシュルレアリスムの創案に帰している。「〈古びたもの〉のうちに現われる革命的エネルギーに出会ったのは，シュルレアリスムが最初である。そうしたエネルギーは，鉄による最初の構成物，最初の工場，最初期の写真，すたれはじめた事物，サロンの両開きの扉，5 年前の服，流行からとり残されはじめている優雅な会合用の店などのうちにあらわれるのである」（ベンヤミン 1995b: 500）。ここで革命的エネルギーといわれるものは，言い換えるなら，過去と現在を短絡させ，衝突させることで，忘却の淵にある過去――主流をなす大文字の歴史により押しつぶされ，

抑圧された過去――についての新たな認識を可能にし，同時に現在の覚醒をうながすような起爆力であるが，そうした起爆力を含む特権的な痕跡ないしはイメージを，ベンヤミンはのちに「弁証法的イメージ」と名づける。

パサージュが，歴史認識上の起爆力をもつのはなぜか。ここで遊歩者たるベンヤミンがパサージュに差しむけている視線は，いわば二重化された視線である。一方には，ガラス屋根に覆われた最先端の店舗が並ぶアーケード街として，19 世紀初頭のパリに華々しく登場し，やがて初期的な産業資本主義の進展とともに絶頂期を迎えることになるパサージュの姿があり，他方には，有機的な生の連関から脱落し，没落し，かつて発散していたアウラ的魅力をすっかり喪失して力なく横たわる，現在のパサージュの姿がある。現前するパサージュの死相に，かつての光輝を放つパサージュの表情を重ね合わせるとき，遊歩者としてのベンヤミンは，そこに一種のモナドを――つまり産業資本主義の勃興と衰退という歴史的過程が，当の資本主義の産物としてのパサージュのうちに，入れ子状に凝縮されたモナドを――見出す。ベンヤミンがパサージュを「弁証法的イメージ」と呼び，やがて引用資料と着想のメモの膨大な集積体を生みだすことになる，長期的なプロジェクトの根幹的モティーフに位置づけるのは，パサージュが，そうした歴史の凝集体としてのモナドとなっているからである。そしてこのモナドとしての痕跡こそが，都市の記憶の深層に触れつつ，現在と過去の敷居を跨ぎこえる，都市を媒体とした想起としての遊歩を駆動する契機となる。それゆえパサージュと遊歩者という組み合わせは，当初より，痕跡と想起，モナドと歴史認識，弁証法的イメージとその読解，等々の組み合わせからなるパサージュ研究の総体を規定する方法論的課題を，具体的な形象として体現したモティーフにほかならなかったのである。

このように考えるとき，興味深いのは，ある時期に――具体的にはパサージュ研究の中断期にあたる 1929 年から 1934 年前後にかけて[3]――ベンヤミンが，こうした都市を媒体とする想起にまつわる方法論的課題を，遊歩者の「陶酔」という問題圏に即して集中的に考察していた事実である[4]。たとえば「長い時間あてどもなく街をさまよった者はある陶酔感に襲われる」[5]（ベンヤミン 1994: 70）といわれるように，アスファルト上で不意に陶酔状態へと誘いこまれる遊歩者の姿に，ベンヤミンはくり返し言及している。街路で出会う不可思議なイメージに誘われ，麻薬を吸飲したかのような陶酔状態に入りこみ，何ものかに引きずられるように，路地から路地へと街を彷徨しつづける遊歩者[6]。ただしここで重要なのは，ベンヤミンにあって遊歩者の陶酔という事態は，たとえば近代的主観の内閉を打ち破り，外部を垣間見させる契機となるといったかたちで，素朴にロマン主義的に称揚されているわけではけっしてなく，それはあくまでも，ハシッシュの吸飲により喚起されるイメージの重層現象や，痕跡のもとでの過去の想起と骨絡みの問題として，もっぱら理論的ないしは方法論的な課題として考察の対象になっている点である。ベンヤミンは陶酔を，それ自体として讃美する傾きのあるシュルレア

リスムから，みずからの立場を厳密に区別しつつ，このように述べている。「アラゴンが夢の領域に留まろうとするのに対して，私の仕事では覚醒がいかなる状況であるのかが見出されねばならない。〔……〕私の仕事では，「神話」を歴史空間のなかへと解体しきることが問題なのである。それは，過去についての未だ意識化されていない知を呼び覚ますことによってのみ可能となる」（ベンヤミン 1993: 7–8）。

じじつベンヤミンは陶酔という問題圏について，この時期，パサージュ研究のプロジェクトに直接的には含まれない一連のテクスト群において，互いに密接に関連する2つの思考ラインのうちで考察を重ねていた。ひとつは言語哲学のラインであり，そこにはハシッシュや夢の世界で活性化する類似性を含むイメージの問題や，太古の人間や子供に特有のミメーシス能力の問題が結びついている。もうひとつは記憶論のラインであり，こちらにはプルースト的な無意志的記憶の問題や，フロイト精神分析における持続的な記憶痕跡という問題が関連している。そしてこれら2つのラインが収斂してくる地点が，痕跡，より精確には，歪みを含む痕跡――「歪曲された類似性」ないしは「非感性的類似性」とも言い換えられる――という概念である。重要なことに，この歪みを含む痕跡という概念のもとで，遊歩者の陶酔をめぐるベンヤミンの思考は，フロイト精神分析の思考にかぎりなく近接してくる。夢や症候が無意識的な形成物であるのと同じく，遊歩者が街路を彷徨するなかで出会う謎を含んだイメージは，都市の忘却された記憶が，歪曲されたかたちで露呈している痕跡という理論的位置を担うことになるのである。痕跡の歪みのうちに封じこめられた「過去についての未だ意識化されていない知」を，現在において読み解き，目覚めさせ，解き放つことにより，現在そのものの覚醒をうながすこと――パサージュ研究は19世紀パリの社会史的広がりの総体を対象として，この仕事を成し遂げようとする試みであるが，その方法論的核心をなすのはまさに，記憶の底に沈んだ過去をいかに想起するかという精神分析的課題なのである。

*

街路に散在する痕跡を蒐集し，その歪みに含まれる謎を判読するなかで，忘れられた過去を想起する行為としての陶酔的遊歩――このような問題圏について本稿では以下，言語哲学と記憶論という2つの思考ラインをたどりつつ，痕跡のもとでの遊歩にかかわるつぎのような3つの契機から検討していきたい。つまり〈読むこと〉，〈想起すること〉，〈迷うこと〉の3つである。判読し，想起し，迷うという3つの契機は互いに密接に関連している。痕跡のもとで遊歩者は，読みながら想起し，想起しながら迷い，迷いながら読む。あるいは読みながら迷い，迷いながら想起し，想起しながら読む。遊歩者は街路を彷徨するうちに，ふと謎めいた痕跡に出会い，このような3つの契機が循環するなかで陶酔状態に入りこむのである。

だがここで，こうした課題をもつ本稿の意義について，ひとつの疑問が生じることだ

ろう。すなわち，ベンヤミンの陶酔する遊歩者というごく限定された主題を，もっぱら思弁的に検討するという本稿の試みは，新たに切り開かれつつある「ストリートの人類学」という領野にたいして，いったいいかなる寄与を果たしうるのかという疑問である。なるほどベンヤミンの思考は，冒頭にみたアジェとの類縁性に示されるごとく，人びとの生の具体的な営みにはおよそ関心を払わず，そうした生の全体的連関から脱落した，死物としての断片的痕跡をこそ，好んで蒐集と解読の対象とするという点で，一見すると，人類学的な感性とはほとんど相容れないようにも思われる。だがしかし，遊歩者を〈陶酔者〉としてとらえ返すという本稿の問題設定は，街路＝ストリートでの人びとの営みや出来事に立ち会う方法という，それこそ「ストリートの人類学」に固有の問題系を考えるうえで，少なからず示唆するところがあるはずである。街路に参与すると標榜しつつも，知らず知らずに距離をとり，安全圏から対象に操作的にかかわる〈観察者〉としてのポジションを疑うこと。そのポジションにそなわる認識論的・存在論的な特権性を，いわば内側から解きほどき，ゆるやかに開いてゆくこと。そして受動的で，無防備で，容易に翻弄されるような状態にあって，対象との距離をなかば喪失し，存在の輪郭が弛んだ危うい瞬間にこそ閃くような都市の相貌をつかみとろうとすること。〈陶酔者〉としての遊歩者にかかわるベンヤミンの思考からは，そうした街路＝ストリート現象をめぐる認識と存在の方法を，ひとつの示唆として受けとることができるだろう。

2 読むこと

まずは言語哲学にかかわる思考ラインについて，〈読むこと〉という契機のもとに検討してみよう。ここでは何よりも，痕跡としてのイメージがそなえる独特の性質が問われなければならない。遊歩者が街路に追い求める対象がイメージであるということは，ベンヤミンのつぎのような言葉からも明白である。

> 〔……〕人間や動物のみならず，霊たち，そしてとりわけイメージ（Bilder）もまた住まうものである，ということを思い起こしてみるならば，何が遊歩者の関心をひくのか，遊歩者が何を探し求めているのかが，手に取るようにありありと見えてくる。それは，すなわち，どこに住まうものであれ，イメージなのだ。遊歩者とは場所の守護神に仕える神官にほかならない。神官の尊厳と探偵の嗅覚とをもつこの目立たない歩行者――彼の物静かな全知には，犯罪捜査学の大家たる，チェスタトンのブラウン神父に通ずるものがある。（ベンヤミン 2007: 372）

だがこのイメージ（Bild）という，ごく素直で単純そうにみえる概念は，ベンヤミンの思考において独自の厄介さをそなえており，注意が必要である。その一筋縄ではいかない性質は，ベンヤミンがイメージの問題をつねに言語との関連で――より詳細にいう

なら，言語の記号性に対立するものとしての，文字の物質性がもつ反乱性を際立たせようとする，ベンヤミン独自の言語観との関連で――考察してきたことに由来する。ベンヤミンは最初期の論考「言語一般および人間の言語について」の時点から，言語の本質的機能を意味の伝達と同一視しつつ，言語をもっぱら意味の透明な媒体とみなすような，構造主義にも通底する言語観を「市民的言語観」と呼び，痛烈な批判の対象としてきた[7]。そして言語のもつ透明な記号的側面に抑圧され，隠蔽されている，文字の物質性の次元にこそ，忘却された原初の直接性の残滓が認められるとして，そうした物質性の次元の奪回と救済を目論んできたのである。ちょうど，ある文字像を長いあいだ凝視していると，しだいに意味の裏づけが失われ，その文字の図像としての側面が遊離し，独立した実質をそなえて浮きあがってくるように，言葉から充実した意味が排出されたところに，謎めいた暗号を発するイメージが出現してくる。ベンヤミンにとっては，このように人間的な意味を欠き，不可解な絵文字へと変貌した言葉こそが重要な意義を担っているのである。記号的次元に還元されない言語の物質性という問題は，痕跡，アレゴリー，象形文字，判じ絵，夢の形象，言葉の骸骨，等々の呼び名のもとでベンヤミンのテクストに登場する。いずれも意味を排出したあとの言葉の残骸，残り滓，抜け殻でありながら，しかもなお何ごとかを意味する謎のイメージとして作用するものである。それゆえイメージというごく単純そうにみえる概念は，言語の物質性という問題系列に並ぶ，痕跡や象形文字，判じ絵と同等の，独特の位置価をもつ概念として受けとる必要がある。

とするならベンヤミンの遊歩者にとって，都市を〈読むこと〉とは，たんに都市を書物のテクストのように読解するという態度を意味するのではないだろう。なるほど「遊歩というものは，しばらく読書の習慣を忘れさせるところがある」（ベンヤミン 1975: 235）という言葉にあるように，ベンヤミンはときに都市を〈読むこと〉を書物のテクストを読解することと類比的に表現している場合がある。その面では，たとえば「都市とは一個の言説であり，この言説は真の意味で一個の言語活動なのである」（バルト 1975: 109）とする R. バルト流の記号論＝テクスト論的な都市論の先駆的存在として，ベンヤミンの遊歩者を位置づけたくなるかもしれない。しかし遊歩者が街路に探し求めるものが，透明な記号などではなく，むしろ痕跡や象形文字，判じ絵と並ぶような，不透明な謎のイメージであることを理解していない点で，こうした把握は，端的に間違っているといわなければならない。バルトが記号を見出すところに，ベンヤミンの遊歩者は痕跡を探し求める。記号が透明な媒体として，特定のコードの秩序のもとに定位しようとするときに，痕跡は，そうした秩序の平面におさまらない不穏な運動をはじめる。とするならバルト流の都市の読み手が，都市を記号の集積体とみながら，そこに隠された編成コードや意味の秩序を読みとろうとするとき，ベンヤミンの観点からすれば，都市を記号の集積へと転換する操作のもとで，ある隠蔽ないしは抑圧の操作がおこなわれ

ていることになる。つまり都市を透明な記号の平面へと還元するさいに，そこから痕跡ないしは物質性の次元が省略されてしまっているのである。ベンヤミンの遊歩者にとって都市を〈読むこと〉は，まさにバルト流の読み手が切り捨てる，反記号的な物質性の次元でこそ実現されるのだとすれば，遊歩者がバルト流の都市の読み手の先駆者であるどころか，事実はその反対なのであり，いうなればベンヤミンはバルトの都市論が展開されるはるか以前に，すでにして一種のバルト批判を展開していたのである。

だがベンヤミンの遊歩者が，街路に痕跡を求めているのだとするとき，そこで実現されている〈読むこと〉とは，どのような事態なのだろうか。そこには，ある特異な次元に属する読みかたが作動している。つまりベンヤミンが言語哲学の文脈で検討していた，太古の人間や子供に特有のミメーシス能力にかかわる読みかたである。ベンヤミンによれば太古の人間は，森羅万象のうちに類推と交感の関係を感受し，大宇宙と小宇宙の照応関係を敏感に察知していた。こうした豊かな類似の関係を見出すミメーシス能力は，しかし，人類の歴史が展開する過程で次第に衰えてきた。「というのも，あきらかに近代人の感覚しうるしるしの世界（Merkwelt）は，古代の諸民族によく知られていたあの魔術的な交感や類推のうちの，ほんのわずかな残滓しか受け継いでいないからである」（ベンヤミン 1996a: 77）。だがベンヤミンによれば，ミメーシス能力は，衰退したようにみえながらじつは変容をこうむっただけであり，現在でも，ある特定の領域で保存されているという。その領域とは，言語と文字の領域にほかならない。ベンヤミンによれば，舞踏や星座，内臓から「まったく書かれなかったものを読む」というのが言語以前の「最古の読みかた」（ベンヤミン 1996a: 81）であり，このように舞踏や星座，内臓から，ミメーシス的に読みとられる類似性，すなわち感性的な把握を超えた「非感性的類似（unsinnliche Ähnlichkeit）」の次元でこそ，太古のミメーシス能力は，言語や文字の領域に受け継がれているのだという。「言語は，ミメーシス的な振る舞いかたの最高の段階であり，非感性的な類似のもっとも完璧な記録保存庫である」（ベンヤミン 1996a: 81）。

ここでいわれる非感性的類似とは，つまり，言葉から意味が抜き取られたあとの物質的な残骸が，なおも暗号めいた意味を発するとき，そこに一瞬だけ閃く類似性にほかならない[8]。言葉はそもそも，それが志向するものとのあいだに類似の関係をもつとベンヤミンはいう。「すなわち，同一のものを意味する異なった言語の語を，その意味されたものを中心にしてその回りに並べてみるなら，それらの語はすべて――それぞれのあいだに，多くの場合ほんのわずかな類似さえ認められないとしても――，その中心にある意味される対象には類似している，ということを究明できるだろう」（ベンヤミン 1996a: 79）。こうした言葉と，それが志向するものとのあいだの類似の関係こそが，すなわち非感性的類似であるのだが，それはとりわけ文字の物質的ないしは図像的性格によって担われるという。通常では言語の記号的側面に抑圧されているミメーシス的な側

面が，ふとした瞬間に前面に迫り出してくるとき，非感性的類似の次元が立ちあらわれる。ちょうど占星術師が，星辰の配置という感覚的なものから，将来の運命という非感覚的なものを読みとるように，意味を欠いた物象としての言葉――あるいは，痕跡や象形文字，判じ絵，痕跡，夢の形象――から，何ごとかの意義がミメーシス的に読みとられるとき，そこには非感性的類似の次元が閃いている。それはベンヤミンによれば，かつて人間と自然のあいだに生きいきと実現されていた魔術的交感の名残なのである[9]。遊歩者が街路上で痕跡に出会い，その謎めいた意義を判読しようとするとき，そこには非感性的類似をミメーシス的に読みとる，太古の人間の読みかたが回帰している。言い換えるなら，痕跡を判読しつつ陶酔する遊歩者のもとには，舞踏や星座，内臓から「まったく書かれなかったものを読む」という「最古の読みかた」が回帰しているのである。

ここで，みてきたような類似性を含むイメージの問題は，遊歩者に喚起される陶酔とも深く関連している。街路上で出会う痕跡としてのイメージを，その象形文字のような歪みのもとで判読しようとするとき，遊歩者は，アスファルト上で麻薬めいた陶酔状態へと入りこむ。そこに切り開かれてくるのは，夢の世界と深く結びあう，類似性のカテゴリーが支配する世界である。

> ハシッシュによって生じる2つの物が同じに見える重層現象を，類似性の概念によって捉えること。ある人の顔が他の顔に似ているという場合には，他の顔のある種の相貌が，はじめの顔のなかにあらわれているということであるが，その場合このはじめの顔は，もとのままであってなんら変わることはない。しかし，このようなかたちで別の顔の相貌が現れ出る可能性には，いかなる基準もなく，したがってその可能性は無限にある。目覚めた意識にとっては，類似性というカテゴリーはきわめて限定された意味しかもっていないが，ハシッシュの世界にあっては無限の重要性をもつ。というのもハシッシュの世界においてはすべてが顔なのだ。そこではすべてが身体的な迫真力をもってあらわれ，その度合いは非常に強いため，顔の場合と同じく相貌があらわれ出るのを探し求めることが可能となる。（ベンヤミン 1994: 72–73）

ハシッシュの世界においては，類似性のカテゴリーのもとで，ひとつの相貌が別の相貌を呼び，互いに重なりあいつつ無限に増殖してゆくイメージの運動が，あらたな知覚の領野を打ち開くことになる。この断片を踏まえるなら，遊歩者の陶酔は，街路に出会うあらゆる事物に「顔」を認めること，すなわち，ある事物に類似した別のイメージが不意に喚起され，事物のうえに重層し，見出された相貌がさらなる連想を無限にくり広げてゆく，そのようなイメージの迫真的な喚起力に身をまかせつつ陶酔すること，と言い換えられるだろう。

3 想起すること

つづけて記憶論にかかわる思考ラインについて，〈想起すること〉という契機のもとに検討をすすめてゆこう。ここでは，街路上に残された痕跡をもとに，忘却された過去を想起する行為としての遊歩をめぐる，ひとつの方法論的な難問に焦点をあてて議論を組み立てることとしたい。それは，遊歩者が街路でおこなう個人的な過去の想起が，いかにして都市の集合的な過去の想起へと結びつくのかという問題である。都市の記憶をめぐるこのような方法論的問題について，ベンヤミンは，パサージュ研究に着手した当初から自覚的であった。たとえばパサージュ研究の最初期から，ややかたちを変えながらも，くり返しベンヤミンのテクストに登場するつぎのような場面がある。

> 街路はこの遊歩者を遙か遠くに消え去った時間へと連れて行く。遊歩者にとってはどんな街路も急な下り坂なのだ。この坂は彼を下へ下へと連れて行く。母たちのところというわけではなくとも，ある過去へと連れて行く。この過去は，それが彼自身の個人的なそれでないだけにいっそう魅惑的なものとなりうるのだ。にもかかわらず，この過去はつねにある幼年時代の時間のままである。それがしかしよりによって彼自身が生きた人生の幼年時代の時間であるのはどうしてであろうか？　アスファルトの上を彼が歩くとその足音が驚くべき反響を引き起こす。タイルの上に降り注ぐガス灯の光は，この二重になった地面の上に二義的な光を投げかけるのだ。（ベンヤミン 1994: 70）

街路を彷徨するなかで，ふと想起へと誘われ，ある過去へと下降してゆく遊歩者。ガス灯の二義的な光に照らされて地面のタイルは二重化し，現在と過去とが相互に浸透しあう境域で，遊歩者は陶酔状態におちいる。ここで奇妙なのは，遊歩者が下降してゆく先にある過去の，不分明な位置づけである。その過去は「個人的」な過去ではないがゆえに魅力的だといわれる一方で，それはやはり「ある幼年時代のまま」であるとされる。しかも同時に，その幼年時代とは「彼自身が生きた人生の幼年時代」であるという。個人的な過去と集合的な過去とが，ここでは交錯し，短絡している。だがこうした次元の異なる過去の交錯ないし短絡は，いかにして生じているのだろうか。遊歩による個人的過去の想起が，そのまま集合的な過去の想起へと通底する契機があるとすれば，それはどのような契機であるのだろうか。

このような問題をめぐってベンヤミンは，1930 年代初頭に書き継がれた回想記――『ベルリン年代記』および『1900 年頃のベルリンの幼年時代』――のなかで，ある実験的な試みをおこなっている[10]。すなわち回想記のなかでベンヤミンは，自分が生まれ育ったベルリンの数々の場所をめぐる幼年時代の記憶の断片を，驚くべき精密なディテールをもって書きとめてゆくのである。たとえば「ブルーメスホーフ十二番地」という短篇では，祖母の住まいを訪れた帰りがけの，夕暮れの路上の様子が描かれている。建物の入口のまえで辻馬車が待っていたこと，軒蛇腹や格子垣のうえに積もる雪の白

さ，リュッツォ岸通りから響いてくる橇の鈴の音，あるいは，ひとつ，またひとつと点灯夫に点されてゆくガス灯――そうした些細なものごとの詳細な印象やイメージが，丁寧に拾いあげられてゆく。ここで重要なのは，これらの断片的イメージが，ある有機的な全体的連関から脱落した，謎のイメージとして立ちあらわれている点である。つまりそれらは，充実した意味が抜き取られた痕跡や象形文字，判じ絵と同様の，ミメーシス的な判読を誘いかける，歪みを含んだイメージとして現出しているのである。ベンヤミンは回想記がもつ性格について，それが自伝的なものではないことを強調しつつ，こう述べている。「自伝は時間や経過に，たえざる生の流れを規定するものに関わるけれども，しかしここで問題とするのは，一個の空間であり，瞬間であり，そして不定なもの」（ベンヤミン 1971: 159）である。同じことが別の箇所で，つぎのようにいわれている。回想記のなかでベンヤミンは，郷愁を誘うイメージを記憶の底から喚起しつつも，そうした幼年期の回想のなかで自己愛的な憧憬の感情におぼれることを避けるために，「過ぎ去ったものの偶然的，伝記的な回復不可能性ではなく，その必然的，社会的な回復不可能性にまなざしを向け」（ベンヤミン 1997: 469）ようとしたのだと。

つまり求められるのは，自伝的な物語を綴ることではない。線型的に連続する時間のうちに記憶を整合的に並べ，家族や幼なじみの相貌が散りばめられた自伝的叙述をつくりあげることは，回避しなければならない。そのかわり，都市の個別的場所と結びついた，逃れやすいイメージの数々を，ある社会的広がりのうちに把捉すること，言いかえれば，個人の記憶と集合的な記憶とが，経験の深い層で結びあう地点で，互いを媒介するイメージをつかまえることが肝要なのである。ベンヤミンの言葉では，「大都市の経験が市民階級のあるひとりの子供の姿をとりつつ沈殿している，そのようなイメージこそをとらえようと努めた」のであった（ベンヤミン 1997: 470）。場所の記憶のなかでは，両親や幼なじみの表情，個々のエピソードは影が薄れてしまい，そのときに視界の隅でとらえていたであろう，どうでもよい細部――格子垣の雪の白さや，遠くからの鈴の音，等々――ばかりが誇張的に思い出される。意識の底に沈殿した，そうした伝記的物語の残り滓のような都市イメージのうちに，ベンヤミンは，個人的な過去と集合的な過去が交錯し，短絡し，ひとつの地平で結びあう可能性をみていたのである。「厳密な意味での経験が存在しているところでは，個人的な過去のある種の内容が集合的な過去のそれと，記憶のなかで結合する」（ベンヤミン 1995d: 425）。

ベルリン回想記で試みられた想起の方法のモデルとなっているのは，プルーストの無意志的記憶である。紅茶に浸したマドレーヌの味をきっかけに，長く忘却していた過去の印象の数々を連鎖的に想起する『失われた時を求めて』の有名な一場面――ここに働いているのが，ある偶然の感覚的刺激を契機として，意識の奥底に沈んでいたイメージが喚起され，それに付随して，印象やイメージのひと連なりがつぎつぎに想起されてくる無意志的記憶である。それは知性の支配下にある意志的記憶と異なり，記憶が喚起さ

れるか否かはまったく偶然に依拠している。プルーストはこう説明する。「過去の喚起は，しいてこれを求めようと求めようとするのも無駄であり，理知のあらゆる努力も無益である。過去は理知の外，その力の届かないところで，何か思いがけぬ物質的な対象のなかに（その物質的な対象の与えてくれる感覚のなかに）隠されている。そうした対象に出会うか出会わないかは偶然による」（ベンヤミン 1995d: 423）。意志的記憶のなかで，注意力の呼びかけにしたがい，貯蔵庫のファイルから引き出されてくるのは，いわば馴致された安全かつ有用な記憶にすぎない。過去についての情報でありながら，そのような情報には「過ぎ去ったもの自体が少しも含まれていない」とプルーストはいう（ベンヤミン 1995d: 423）。それにたいして，無意志的な想起にあっては，過ぎ去ったものが，連続的時間を跳び越えて現在に侵入してくるのである。

記憶痕跡は「それを残す過程が一度も意識にのぼらなかった場合に，もっとも強力でありもっとも持続することがしばしばある」というフロイトの言葉に，ベンヤミンは注目している。「それはプルーストの言い方に翻訳すればこうなる。無意志的記憶の構成要素になりうるのは，はっきりと意識をもって〈体験された〉のではないもの，主体に〈体験〉として起こったのではないものである」（ベンヤミン 1995d: 427）。意識のなかで明確に体験されず，理知の支配をすり抜けて，無意識のなかに潜りこんでいた残り滓のような記憶こそが，強い持続力をもって残存しつづけ，ある偶然の契機により不意に，鮮烈な印象とイメージの連鎖を浮かびあがらせる。それゆえプルーストの方法は，過去の再構成というよりも，むしろ「忘却」に近いとベンヤミンは指摘する（ベンヤミン 1996b: 415）。ひとつの人生を「あったままに描く」のではなく，体験をした当人が「思い出すままに描く」のでもなく，むしろ，忘却されたままの人生を描きだすこと。連続的な物語を紡ぎだそうとする意識の力が届かない，意味を欠落させた屑のような記憶の細片を，忘却の淵から立ちのぼらせることが，プルーストの無意志的想起の方法である。それは現在の地点から過去をふり返り，反省的な構えをもって過去を再構成することではなく，むしろ過去を現在に侵入させ，閉塞した自我を賦活しようとする現前化の方法というべきである。「『失われた時を求めて』とは，ひとつの生涯全体に，精神の最高度の現前を充電しようとする，不断の試みなのだ。反省ではなく――現前化こそが，プルーストのやり方である」（ベンヤミン 1996b: 435）。

以上でみてきたように，自伝的要素を可能なかぎり取り除きつつ，記憶の底から喚起された，数々の場所をめぐる断片的イメージを連ねた回想記を書き継ぐなかで，ベンヤミンは，都市を媒体として忘却された過去を〈想起すること〉の方法論的モデルを模索しつつあった。そしてその試行のなかで，記憶の底に沈んだ意識化されざる都市のイメージこそが，時間の隔たりを超えて過去と現在を短絡させ，個人的記憶と集合的記憶という異なる次元を交錯させる特異点として，方法論的モデルの鍵という位置に浮上してきた。注目したいのは，このような模索の過程で，ベンヤミンの思考において，イメー

ジの問題圏と記憶の問題圏とが互いに重なりあってくるという事実である。すなわち，これまで検討してきた言語哲学と記憶論という2つの思考ラインが，〈都市の記憶をめぐるイメージ〉もしくは〈都市のイメージをめぐる記憶〉という問題圏において，同一の地点に収斂してくるのである。重要なことに，その2つのラインの結節点になっているのが，歪みを含む痕跡という概念にほかならない。そして，この歪みを含む痕跡という概念のもとで，ベンヤミンの思考はフロイト精神分析の思考と深く切り結ぶことになる。じじつ，ベンヤミンにおけるフロイトからの理論的継承関係を精密に検証したS. ヴァイゲルによれば，精神分析の記憶理論を検討するなかで，ベンヤミンは「歪曲」の概念から主要なインパクトを受けており，その影響は「歪曲された類似性」ないしは「非感性的類似」という概念が導入されたことに示されているという。ヴァイゲルによればこれらの概念は，ベンヤミンの思考の軌跡において重要な結節点になっている。「歪曲された類似性の概念において，彼の理論的な企てにおける2つの軌跡が交錯する。すなわち一方では，『創世記』の読解にまでさかのぼりうる，類似性の概念に関連した魔術言語をめぐる彼の考察であり，他方では，ベンヤミンが記憶の研究をつうじて到達した，「歪曲」の用語に結びついた無意識の言語の概念である」（Weigel 1996: 136）。

無意識的形成物としての夢や症状と同じく，記憶の深い層から立ちのぼる都市の断片的イメージは，どこかしら誇張され，変形され，不均等に歪んでいる。だが，その謎めいた歪みこそが，類似したイメージの重層を喚起し，忘れ去っていた無意識的な連想を引きずりだしてくる重要な契機となる。プルーストが「類似性を熱心に研究」し，それを「情熱的に崇拝」していたことにベンヤミンは注意を傾けている（ベンヤミン 1996b: 420）。「あるものと別のものとの，私たちが予期するような，目覚めているときの私たちの関心をひくような類似性は，夢の世界のもっと深い類似性の周辺にちらつくものにすぎない。夢の世界では出来事が，決して同一のものとしてではなく，似たものとして，つまり見分けがつかないほどそれ自体に似たものとして出現する」（ベンヤミン 1996b: 421）。意識を弛緩させたなかば夢遊状態にあるとき，そこには，ハシッシュの世界のような類似性が支配する領域が切り開かれてくる。それは同時に，森羅万象のうちに類似の関係を感受する，太古の人間や子供に特有のミメーシス能力が活性化する領域でもあるだろう。プルーストが求めていた郷愁とは「類似の状態において歪められた世界への郷愁」なのであり，「この世界のなかで，現実生活の真の相貌，そのシュルレアリスム的な相貌が出現してくる」（ベンヤミン 1996b: 421）のだという。通常の感覚からすれば，歪められた状態とは，何かしら虚偽的な状態を意味しており，歪められる以前の原型こそが望ましいとされるのだが，プルーストにおいては歪められた状態こそが子供の世界に忠実な様相であり，現実の「真の相貌」を垣間見せる可能性を秘めた世界として，熱烈な郷愁の対象となるのである。

4 迷うこと

都市の街路に散在する痕跡を蒐集し，その痕跡の歪みに含まれる謎をミメーシス的に読みとる陶酔状態のなかで，忘れ去られた都市の記憶の深層に触れようとすること――以上では陶酔的遊歩を，このような痕跡をめぐる判読と想起の行為として，〈読むこと〉と〈想起すること〉という2つの契機から検討してきた。ここではさいごに，痕跡のもとでの陶酔的遊歩にかかわるもうひとつの契機，すなわち〈迷うこと〉という契機に着目することにしよう。この文脈でまず注目すべきは，ベンヤミンがベルリン回想記のなかで語っているある奇妙な区別，すなわち道が分からず迷うことと，森のなかで迷うように街路で迷うことという区別である。興味深いのは，ベンヤミンが後者の迷いかたを習練を要する技術として称揚している点である。

> ある都市で道が分からないということは，たいしたことではない。だが，森のなかで道に迷うように都市のなかで道に迷うことは，習練を要する。この場合，通りの名が，枯れ枝がポキッと折れるあの音のように，迷い歩く者に語りかけてこなくてはならないし，旧都心部の小路は彼に，山あいの谷筋のようにはっきりと，一日の時の移ろいを映し出してくれるものでなければならない。この技術を私が習得したのは，ずっとのちのことである。そして，私の学校ノートの吸取紙に，さまざまな迷宮となって最初の痕跡を記していた夢を，この技術は叶えてくれたのだった。（ベンヤミン 1997: 492–493）

一方で，道が分からないというのは，都市の地図的認識が不完全であったり方向感覚が一時的に混乱したために，自身の位置を見失った状態であり，それはつまり認識ないしは感覚の一時的な欠損状態を意味しているだろう。けれども，森のなかで迷うように都市のなかで迷うというのは，何らかの能力の欠損状態というわけではない。森のなかで迷う者には，ある些細な物音や，ふとした光や影の移ろいが，ことごとく何ごとかの徴候であるように感じられる。周囲のあらゆる事物から，暗号めいた，秘密のシグナルが送られているように知覚される。そのように徴候がささやき声を交わしあう森へと，ありふれた日常的な街路空間を変貌させることが，ベンヤミンの称揚する迷うことの技法なのである。容易に想像されるように，ここには，万物のうちに類推と交感の関係を感受するミメーシス能力が関与している。すなわち舞踏や星座，内臓から，非感性的な類似を読みとる，あの「最古の読みかた」が，ここには回帰しているのである。日常的意識には隠されている密かな類似性の関係を，凡庸な都市空間のうちに取り戻しつつ，その類似性のざわめきのなかで迷うこと――そのとき都市は陶酔する遊歩者のもとに，謎めいた〈迷宮〉としての相貌を垣間見せる。

痕跡を〈読むこと〉，また痕跡のもとに〈想起すること〉は，それぞれ〈迷うこと〉と密接に関連している。一方で，痕跡のミメーシス的判読にあっては，その痕跡が含む歪みを解読することにより，痕跡を生みだした当のもの，痕跡の背後にあるオリジナル

へと到達することが目指されているわけではない。それは精神分析において，夢や症候には歪曲が付加されており，そうした無意識的形成物を生みだした「原因」には原理的に到達しえないのと同じである。痕跡の背後に，一意的に確定可能な何ものかが隠れているはずだと想定し，それを暴くことに専心するのではなく，痕跡の判読においては，むしろ歪みへとみずから同一化し，身をまかせるなかで，その歪みに折り畳まれた過去の厚みをまるごとなぞるような態度が必要となる。ちょうど判じ絵を相手にするときには，隠された図形を読みとろうと意識を集中させるのではなく，むしろ意識をなかば拡散させた状態で眺めることにより，急に図と地が反転し，思いがけない図柄が眼前にあらわれてくるように。あるいはまた他方で，痕跡としての謎のイメージを契機とした想起にあっては，ある連続した時間の流れのうちに個々のエピソードが整序された，線型的物語を紡ぎだすことが求められているわけではない。むしろそうした同一的かつ単線的な物語からは脱落する，全体的連関から切断された残り滓のような断片的イメージをもとに，ありえたはずの過去，ありえたかもしれない過去，可能なる過去の数々を想起することが目指されるのである。このように痕跡を〈読むこと〉，また痕跡のもとに〈想起すること〉にまつわる態度は，まっすぐに目的地に向かう直線的経路をとるのではなく，むしろそれを回避するようにして，渦状の錯綜する経路を逡巡しつつ歩む，遊歩者の迷いの足どりと重なってくるだろう。「迷宮は逡巡する者の故郷である。目的地に着くことを恐れる人のたどる道は，容易に迷宮を描くであろう」（ベンヤミン 1995e: 379）。

*

冒頭のアジェについてベンヤミンは，当の写真家をいみじくも「鳥占い師や腸卜師の末裔」と呼んでいる。眼前に広がる都市風景を死んだ痕跡としてフィルムに定着させ，そこに都市の「シュルレアリスム的な相貌」を浮かびあがらせようとしたアジェについて，この呼び名はたいへん似つかわしいといってよい。だが同時にそれはひるがえって，遊歩者としてのベンヤミンにも相応しい呼び名であるだろう。街路に痕跡を蒐集し，その謎を判読するなかで可能なる過去の数々を想起する，写真家アジェと遊歩者ベンヤミン――彼らの眼には，都市はまさしく〈迷宮〉として映っていたに違いない。

*

さいごに，本稿で展開した議論が「ストリートの人類学」という領野にいかなる寄与を果たしうるのか，その可能性の所在をごく簡潔に示しておきたい。ある箇所で，ひとつの都市に近づいてゆく方法について，ベンヤミンは「研究する」ことと「習い覚える」こととの違い――これは先述の，道が分からず迷うことと，森のなかで迷うように街路で迷うことの区別と重なる――に言及している。「研究することは誰でもできるが，習い覚えることができるのは，持続的なものを目指している者だけなのだ」（ベンヤミン

2007: 377)。研究することは誰でもできる，というのはつまり，ある特定の視座に立ち，そこから観察という身構えのもとで，対象としての都市的現実にアプローチすることは，比較的容易な仕業だということである。ただし，そうして獲得される知見には限界がある，という含みがここにはある。それにたいして，より困難だが，それだけ重要な接近方法としてベンヤミンが呈示するのは，子供のように未知の状態から恐るおそる都市的現実に入りこみ，少しずつ身体を馴染ませながら都市を「習い覚える」ことである。そうした持続的関係のなかでこそ，意識の奥底に，観察する者の眼には取り逃される都市の印象やイメージが，澱のように沈殿してゆく。そうしてこの澱のような経験を媒介として，はじめて都市的現実の真相に近づいてゆくことが可能となる——。ベンヤミンのいう「研究する」者と「習い覚える」者との対比は，そのまま本稿で論じてきた〈観察者〉と〈陶酔者〉という，遊歩者の２つの側面の対比的関係に相即するだろう。ここで，後者の「習い覚える」者の態度に示唆される，街路＝ストリートをめぐる認識と存在の方法は，ストリート現象に迫ろうとする人類学の接近方法と，深く通底しているのではないだろうか。机上で考案された既定の方法，誰でも利用可能な標準パッケージとしての方法を，外側から，個別具体的な対象へと持ちこみ，適用しようとするのではなく，当の対象との慣れ親しみ——そこには当然ながら誤解や葛藤，暴力の危険も含まれるだろう——の経験のただなかで，事後的に方法を立ちあげてゆくこと。自身の観察者としてのポジションを内側から解きほぐし，ゆるやかに開いてゆく，そうするなかで触れあう対象の，いわば深度と肌触りを，そのまま方法へと持ちあげてゆくこと。それはそのまま〈観察者〉としての特権的な身分を捨て，より危うい不安定な存在へ，街路上の出来事に巻きこまれる，受動的な〈陶酔者〉の境位へと下降してゆくことにほかならない。

すでに述べたように，廃物や死物を愛好するベンヤミンの思考は，一見すると，人びとの具体的な生の営みをとらえる人類学の感性の，ほとんど対極に位置するともいえるだろう。だがしかし，たとえば上述のような都市への接近方法という地点で，ベンヤミンの遊歩者と「ストリートの人類学」は，思いがけない出会いを果たしうる。この出会いから直接的に有用な知見が得られるといった寄与は望みがたいとしても，この両者の密かな呼応関係は「ストリートの人類学」という地平の可能性を遠くから，しかし力強く，照らしだしてくれるのではないだろうか。

注

1) 別の言い方をするなら，ここには，断片的細部を蒐集することで，居住者たちの生活の実態を再構成しようとする意図があるわけではない。アジェにせよベンヤミンにせよ，断片的な細部は，その全体性を回復するために蒐集されるのではない。写真家と遊歩者の興味を惹きつける細部は，ある全体を構成する部分としての細部というわけではなく，むしろ整合的な

全体に統合しえず，回収しえない余剰なのであって，余剰であるからこそ，人びとの日常的意識からは取り逃されているのである。

2) 痕跡の判読としての遊歩について，もうひとつの例をあげよう。「遊歩者という類型を生みだしたのは，ほかでもなくパリなのだ」（ベンヤミン 2007: 368）。そのようにいうベンヤミンは，パリとローマとを対比したうえで，ローマでは遊歩が困難であるという。その理由をベンヤミンはこう説明している。ローマは「神殿や囲われた広場や国民的聖所などでいっぱいなので，そうしたものに分割されることなくこの都市が，ひとつのひとつの舗石を踏む，ひとつの店の看板を目にする，ひとつの石段，ひとつの門道に足をやる，その度ごとに，歩行者の夢のなかに入り込んでくることは，不可能なのではなかろうか？」（ベンヤミン 2007: 368–369）と。ローマの街は物語で埋めつくされている。すでに十分に物語化され，重たいほどの意味を吸いこんでいる建造物や広場は，遊歩者の眼に，意義深い痕跡としては浮かびあがってこない。ローマでは，あたかも観光客のまなざししか許されないようであり，都市のあらゆる部分は，すでに流通している旅行パンフレットのごとき物語へと回収されてしまい，残らず，隈なく，意味づけられてしまっている。それにたいして，物語性にさほど支配されていない街では，日常の現実の隅にある，舗石や看板，石段や門道こそが，謎を含む痕跡として，遊歩者の夢想的陶酔を誘いだす。というのも舗石や看板，石段や門道にこそ，街路を住みなした人びとの痕跡が，歪んだかたちで残されているのである。住居としての街路は，そこに住まった人びとの生活の痕跡を留めている。遊歩者はそうして残された痕跡を，遊歩の夢想状態のなかで判読しようとするのである。

3) 1927 年に着手されたパサージュ研究は, 1929 年に一時的に中断され, 1934 年より再開されて，ベンヤミンが自ら命を絶つ 1940 年まで継続されるのだが，まさしくその中断期に，つぎのような一連の考察が重ねられているのである――すなわち，陶酔の力から革命への契機を引きだそうとするシュルレアリスム運動の可能性を検討した「シュルレアリスム」（1929 年），幼児期の歪んだ世界への郷愁を語るプルーストを批評した「プルーストのイメージについて」（1929 年），ハシッシュの吸飲実験にもとづく陶酔経験を考察した「マルセイユのハシッシュ」（1932 年），太古の人間や子供に特徴的なミメーシス能力を探究した「類似性についての試論」（1933 年）と「模倣の能力について」（1933 年），そしてさいごに，プルーストの無意志的想起を自ら実践した回想記である「ベルリン年代記」（1932 年）および「1900 年頃のベルリンの幼年時代」（1932 年）。

4) 遊歩者を〈観察者〉から〈陶酔者〉へと読み替える試みについては，拙著（近森 2007）において，遊歩者の陶酔を喚起する 3 つの形象（「街路名」「ガス灯」「人形」）に即しつつ，それぞれに対応する言語＝記憶論，技術＝アウラ論，商品＝フェティシズム論という 3 つの理論的局面から，より広範な文脈を踏まえつつ考察している。本稿の議論は，拙著で展開された議論と密接に関連しつつも，もっぱら痕跡という理論的焦点より，遊歩者の陶酔という問題をとらえ返している点で，独立の論考として位置づけられる。

5) この文章が含まれる断片の全体は以下のようである。

> 長い時間あてどもなく町をさまよった者はある陶酔感に襲われる。一歩ごとに，歩くこと自体が大きな力をもちはじめる。〔……〕次の曲がり角，はるか遠くのこんもりした茂み，ある通りの名前などがもつ磁力がますます抗いがたいものとなってゆく。〔……〕禁欲的な動物のように彼は，見知らぬ界隈を徘徊し，さいごにはへとへとに疲れ果てて，自分の部屋に――彼によそよそしいものに感じられ，冷ややかに迎え入れてくれる自分の部屋に――戻り，くずおれるように横になるのだ。（ベンヤミン 1994: 70）

6) 陶酔にかかわるベンヤミンの記述をもう少し紹介しよう。ある箇所では「遊歩者が街を徘徊

するときに耽っているあの追憶としての陶酔」（ベンヤミン 1994: 71）とあるが，ここでは陶酔的遊歩が，追想の問題圏と明確に結びつけられている。あるいはまた「遊歩のさいに，空間的にも時間的にもはるか遠くのものが，いかに今の風景と瞬間のなかに侵入してくるかは，知られているとおりである」としつつ，そうした様相を「こうした状態の真に陶酔めいた段階」（ベンヤミン 1994: 76）と呼んでいるが，ここではハシッシュの陶酔にも似たイメージの重層現象と無意志的な想起との関連が示唆されている。

7) 初期の言語論「言語一般および人間の言語について」には，このようにある。「この市民的言語観の言わんとするところは，伝達の手段が言葉であり，伝達の対象は事柄であり，伝達の受け手は人間である，ということである」（ベンヤミン 1995a: 15）。

8) なおここで，「類似の知覚は，いかなる場合でも，一瞬の閃きというものに拘束されている」のであり，それは「一瞬眼の前に現れたかと思うと，たちまちに消えてしまう」といわれるのだが，こうした瞬間的な読解可能性という論点は，のちに，唯物論的な歴史認識の瞬間性という論点につながってゆく。「過去の真のイメージはさっと掠め過ぎてゆく。過去は，それが認識可能となる刹那に一瞬ひらめきもう二度と立ち現れはしない，そうしたイメージとしてしか確保することができない」（ベンヤミン 1995f: 648）。

9) ここで理解を助けるために，やや唐突ながら，この非感性的類似の問題が，感覚的に描かれたひとつの文章を紹介しておきたい。それは萩原朔太郎が 1937 年に発表した「虫」という題の，短篇小説とも散文詩ともつかない文章である。これはあるとき主人公が，ふと道を歩きながら「鉄筋コンクリート」という言葉を口に浮かべ，その言葉に取り憑かれてしまうという，たいへん奇妙な作品であるが，ここには，ベンヤミンのいう非感性的類似の問題が明瞭に描かれている。主人公はその言葉が思い浮かんだ唐突さと，その言葉が含む謎めいた側面について，こう語る。「何故にそんな言葉が，私の心に浮かんだのか，まるで理由がわからなかった。だがその言葉の意味の中に，何か常識の理解し得ない，或る幽幻な哲理の謎が，神秘に隠されてゐるやうに思はれた」。それ以来，主人公は家にいるときも外に出ているときも，つねに「この詰らない，解りきつた言葉の背後にひそんでゐる，或る神秘なイメーヂの謎を模索して居た」。しかもその言葉は，ある独特の聴覚的リズムをもって，執拗に，主人公の頭のなかへと反復してくる。「悪いことにはまた，それには強い韻律的の調子があり，一度おぼえた詩語のやうに，意地わるく忘れることができないのだ。「テツ，キン，コン」と，それは三シラブルの押韻をし，最後に長く「クリート」と曳くのであつた」。そうした言葉の謎を，主人公は友人に尋ねるのだけれども，当然ながら友人は「市民的言語観」の立場から，その言葉が指示する日常的な意味内容を尋ねているものと受けとり，こう答える。「そりや君。中の骨組を鉄筋にして，コンクリート建てにした家のことぢやないか。それが何うしたつてんだ。一体」。だが主人公は，こうした当然の回答に満足せず，不平を色にあらわす。「ちがふ。僕はそれを聞いてるのぢやないんだ」。そしてこう続ける。「それの意味なんだ。僕の聞くのはね。つまり，その……。その言葉の意味……表象……イメーヂ……。つまりその，言葉のメタフイヂツクな暗号。寓意。その秘密。……解るね。つまりその，隠されたパズル。本当の意味なのだ。本当の意味なのだ」。主人公は，自分が知ろうとする次元の所在をうまく表現することができず，言い淀み，言葉に詰まり，つい「本当の意味なのだ」と幾度もくり返すことになる。この主人公が言いあてようとしている次元こそ，ベンヤミンが非感性的類似という名辞で示した次元にほかならない。この主人公にとって「鉄筋コンクリート」という言葉は，充実した意味が抜け落ちて骸骨となり，しかもなお，その物質的な残滓が何ごとかの謎を意味している，不可解な痕跡として立ちあらわれている（萩原 1995）。

10) アドルノはベルリン回想記についてこう述べている。「これはその生涯の最後の十五年間に

ベンヤミンが努力した，かの近代の原史に属すものの1つに数えられるもので，パリのパサージュをめぐって計画された作品のために彼が集めた素材群の，主観的な対応物となっている」（アドルノ 1991: 31）。すなわちパサージュ研究が，19 世紀パリの社会史的な素材群をもとに「19 世紀の根源史」を照準していたのだとすれば，その主観的対応物として，自身の幼年期のベルリンを対象とした回想記がある。一方で，時間の連続的流れのもとに記憶を整序する伝記的物語を避け，そのかわりに，そうした物語から漏れ落ちる逃れやすい都市のイメージこそを，無意志的想起のもとで拾いあげるというベルリン回想記の方法。他方で，歴史主義の連続的な時間意識を破砕し，現在と過去とが衝突する一瞬の閃きのうちに，弁証法的イメージが解読可能な布置連関を構成するなかで，過去の真の認識を得るというパサージュ研究の方法。両者はたしかに深い呼応関係をとり結んでいるだろう。いずれの方法も，痕跡の判読により「歴史についてのいまだ意識化されていない知を呼び覚ます」（ベンヤミン 1993: 7–8）という課題を含んでいるのである。

文　献

アドルノ，T. W.

1991 『ヴァルター・ベンヤミン』大久保健治訳，河出書房新社。

アスマン，A.

2007 『想起の空間』安川晴基訳，水声社。

バルト，R.

1975 「記号学と都市の理論」篠田浩一郎訳『現代思想』3 (10): 106–115。

ベンヤミン，W.

1971 「ベルリン年代記」小寺昭次郎編集解説『ベルリンの幼年時代』（ヴァルター・ベンヤミン著作集 12）pp. 123–216，晶文社。

1975 『書簡Ⅰ　1910–1928』（ヴァルター・ベンヤミン著作集 14）野村修編集解説，晶文社。

1992 「類似したものについての試論」道籏泰三訳『来たるべき哲学のプログラム』pp. 274–290，晶文社。

1993 『パサージュ論Ⅳ　方法としてのユートピア』今村仁司・大貫敦子・高橋順一・塚原史・三島憲一・村岡晋一・山本尤・横張誠・與謝野文子訳，岩波書店。

1994 『パサージュ論Ⅲ　都市の遊歩者』今村仁司・大貫敦子・高橋順一・塚原史・三島憲一・村岡晋一・山本尤・横張誠・與謝野文子訳，岩波書店。

1995a「言語一般および人間の言語について」浅井健二郎編訳・久保哲司訳『近代の意味』（ベンヤミン・コレクションⅠ）pp. 9–36，筑摩書房。

1995b「シュルレアリスム」浅井健二郎編訳・久保哲司訳『近代の意味』（ベンヤミン・コレクションⅠ）pp. 491–518，筑摩書房。

1995c「写真小史」浅井健二郎編訳・久保哲司訳『近代の意味』（ベンヤミン・コレクションⅠ）pp. 551–582，筑摩書房。

1995d「ボードレールにおけるいくつかのモティーフについて」浅井健二郎編訳・久保哲司訳『近代の意味』（ベンヤミン・コレクションⅠ）pp. 417–488，筑摩書房。

1995e「セントラルパーク」浅井健二郎編訳・久保哲司訳『近代の意味』（ベンヤミン・コレクションⅠ）pp. 357–415，筑摩書房。

1995f「歴史の概念について」浅井健二郎編訳・久保哲司訳『近代の意味』（ベンヤミン・コレ

クションⅠ）pp. 643–665，筑摩書房。
1996a「模倣の能力について」浅井健二郎編訳・久保哲司訳『エッセイの思想』（ベンヤミン・コレクションⅡ）pp. 75–81，筑摩書房。
1996b「プルーストのイメージについて」浅井健二郎編訳・久保哲司訳『エッセイの思想』（ベンヤミン・コレクションⅡ）pp. 413–441，筑摩書房。
1997 「一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代」浅井健二郎編訳・久保哲司訳『記憶への旅』（ベンヤミン・コレクションⅢ）pp. 463–633，筑摩書房。
2007 「遊歩者の回帰」浅井健二郎編訳・土合文夫・久保哲司・岡本和子訳『批評の瞬間』（ベンヤミン・コレクションⅣ）pp. 366–377，筑摩書房。
近森高明
2007 『ベンヤミンの迷宮都市——都市のモダニティと陶酔経験』世界思想社。
デリダ，J.
1983 『エクリチュールと差異』（上・下）若桑毅・梶谷温子他訳，法政大学出版局。
フロイト，S.
1996 「快感原則の彼岸」竹田青嗣編・中山元訳『自我論集』pp. 113–200，筑摩書房。
Gilloch, G.
1996 *Myth & Metropolis: Walter Benjamin and the City*. Cambridge: Polity Press.
萩原朔太郎
1995 「虫」『猫町　他十七篇』pp. 72–78，岩波書店。
前川　修
2004 『痕跡の光学——ヴァルター・ベンヤミンの「視覚的無意識」について』晃洋書房。
Weigel, S.
1996 *Body-and Image-Space: Re-reading Walter Benjamin*. London: Routledge.